

# 京都教区時報

発行 京都司教区  
責任者 村上透磨  
京都市中京区河原町  
三条上ル  
カトリック会館  
FAX  
075-211-3041  
「教区時報」宛と明記

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp>

2頁 滞在外国人との連帯

4頁 社会と共に歩む教会の事例

点訳版「京都教区時報」〈無料〉  
ご希望の方は点訳ネット「レジ  
ナ」代表嶽崎(たけざき)裕子さ  
んまで申込みください。

TEL・FAX 0794-31-8601



## マリア様と共に

(私を忘れないでね)

「家庭」、家には睦ぐ場所(庭)がある。「フォアイエ」、家には家庭を温める暖炉がある。

アットホーム、家庭で「くつろぎ」、その家の中心に、母がいて、家庭はほのぼのとあたたかい。家の奥には大黒柱があつて、それを支えるのがうちの「大黒」さん。

家の奥には「奥方」さんがいて、家の者たちを静かに見守り、安らかにしている。そんな方がお母さん。そう言えば、母という字は西のお乳から来るとか。重乳の母、マリア様は、私たちのお母さん。テレジアは言います。「マリア様は、女王である以上にお母さん(ママ)です。」「ママですから、何でもお願い出来ます。」

マリア様は、最愛の御子の十字架のかたわらに立って、私たちの母とも、なつて下さいました。

私たちの共同体が、苦難の最中にある時に、母で

あり続けます。

聖母を、見捨てないで下さい。

12  
2003

## 滞日外国人との連帯と

### 多国籍の教会共同体作り

教区『カトリック国際ファミリーデーin三重』よせて

京都司教 パウロ大塚喜直

日本のカトリック教会には諸外国からの多くの信徒が参加するようになりまし。京都教区二十世紀の五つの宣教優先課題の第二番目は、『滞日外国人との連帯と、多国籍の教会共同体作り』です。

毎年九月第四日曜日は、「世界難民移住移動者の日」になっていきますが、京都教区ではこの日に合わせて、教区の五つの地区を毎年巡回にして、「カトリック国際ファミリーデー」を行うことになりました。今年はその第一回目で、三重地区の主催で行われます。

三重地区にもいろいろな国の信徒がいますが、特に日系ブラジル人をはじめ、ラテンアメリカの国々からの人たちが、またフィリピン人たちの共同体があります。共同宣教司牧を推進するために、彼らとの相互の交流と理解を深めた協力

は不可欠です。国際ファミリーデーのミサで、私たちの滞日外国人の人たちとの一致と協力の恵みを祈り、また交流会では友情を深めましょう。一人でも多くの方の参加をお願いします。また参加できない人も、この日の意向に合わせてこころをひとつにしてお祈りください。

### 教区難民移住移動者委員会

国際協力委員会

パトリック・オヘール

京都教区は、この委員会の活動を通して、日本人の共同体と滞日外国人の共同体とのINTERATION（一致協力）を目指しています。

特に、お互い、あるいは、それぞれの文化や民族の習慣を尊重しながら、交流と友情を進め、互いに理解しながら他文化共生教会共同体を築いていこうとしています。京都教区内での移住移動者の増加は大きく、今、日本人信徒の一・

五倍、約三万人以上になっていきます。彼らの主な出身国はブラジル、ボリビア、ペルー、フィリピン、韓国などです。

最近の傾向として、母国から家族を日本に呼ぶことによる家族の人数の増加や、日本で生まれる子どもたちが増えています。そのため、子弟への信仰教育の必要性が重くなり、教会学校への参加、洗礼、堅信の準備のために小教区との一致協力がさらに重要になっています。

教区には支援センターを置いていませんが、できるかぎり小教区単位に（まず拠点教会、つまり外国語ミサのために外国人が大勢集まってくる教会）ボランティアを募集し、生活相談、子弟の教育、翻訳、役場との交渉の手助け、場合によって住宅の保証人などの協力を依頼しています。ボランティアには荷の重い内容については、NPOや市民団体などに協力をお願いしています。そのために小教区の皆さんの理解と協力をお願いしています。また、そのひとつの取り組みとして、小教区での滞日外国人とともに歩いていく意識の向上のために小教区から一名以上の委員の選出、地区単位での連絡

会の開催、年一回全委員参加の集会、また、定期的な研修会を計画中です。小教区の滞日外国人担当者の主な役割は日本人と外国人、または、外国人と役員会との間の橋渡しとなることです。

### 国際ファミリーデーin三重

名張教会 柴 龍一郎

九月二十八日（日）、秋晴れの心地よい風吹くこの日、教区行事の国際デー第一回目が、三重県津市にあるセント・ヨゼフ学園で行われました。それは明るく和気あいあいとして、とても楽しく、実に有意義な集いでした。京都教区二十一世紀五つの目的のひとつで、福音宣教優先課題「滞日外国人の人々との連帯と、多国籍の教会共同体作り」です。

共同ミサが十一時過ぎ、子供たちの行列から厳かに始まり、滞日外国人の各民族衣装を羽織った子供たちや青年男女の各国語による祈り、彼らが奏でる聖歌の伴奏、コーラスは日本の若者に感動を与え、良い影響がありました。この日のため一生懸命練習したことでしよう。

そして昼食の時間は、楽しい会



国際ファミリーデー in 三重

話のうち各国の郷土料理は珍しく、おいしくいただきました。滞日外国人と日本人信徒同士や、聖職者との明るい笑顔と分かち合い、そのなかで心温まり癒される一コマがありました。あるアフリカの男性信徒と、美しい中国人女性との間で四カ月前、日本で生まれた赤ちゃん、日本のある若者夫婦の赤ちゃん同士の交流でした。オニネッチちゃん(ナイジェリア語で神の恵みとの意)が両手を広げて、生まれた日がわずか四日しか離れていない未千流ちゃんを抱きかかえる姿は、周りのひとたちに爽やかな感動を与えてくれ、天使の笑いの輪に包まれた和やかなひと

きでした。

その後のイベントでは、民族舞踊や歌、伝統芸能など異文化の交流に、各信者さん、司教様の参加は大きな笑顔と盛大な拍手で、司教のモットーである「みながひとつになるように」そのものでした。この繰り返しによって私たちが望む神の国、平和な世界を皆で見て、肌で感じ、葡萄のような丸い心を感じました。

世界数十億人の中での小さな集いでしたが、神様とこのような企画に協賛された各信徒、施設や協議会実行委員の皆さまに感謝いたします。

### 国際交流ミサに参加して

鈴鹿教会 山根デニス

今回、九月二十八日に行われたカトリック国際ファミリーデー in 三重を通して、貴重な体験をさせていただきました。他国籍の方々と一緒にこのミサの準備に取り組んで、改めて、神の前では、国籍や文化の違いに壁が存在しないということを思いました。

今回はファミリーデーというテーマで、たくさんの家族が参加しました。その中で、印象に残ったの

は大勢の子供たちの参加でした。入堂や奉納の時に子供たちが積極的に参加して、すごく良かったと思います。それと今回のミサは国際ということもあって、日本語を中心に他国の言葉も入れて、今までと違ったいい体験が出来たと思います。

ミサ終了後に皆さんと一緒に食事をして、さらに交流を深めました。試食コーナーでは、様々な料理を試食して、みんなでそれぞれの文化を分かち合いました。

そのあとのイベントやアトラクションでは、各国の遊び、踊りを見る事が出来ました。その中でも司教様の参加もあって、すごくにぎやかでした。

本当に楽しい一日でした。これからもこのような一日を体験していきたいです。

### 三重南勢ブロック合同ミサ

松阪教会 杉田幸子

九月七日(日)、三重県南勢ブロック(松阪・伊勢)は、松阪教会にて合同ミサを行いました。昨年の司教訪問時の合同ミサがきっかけとなり、「今年も合同ミサをしましょう」との声が上がり、企

画されたものです。九月二十八日には、教区行事「国際ファミリーデー in 三重」に先立つこの行事は、ブロックレベルでの国際交流を図ったものです。この地域にも多くの外国人が住んでいます。普段は英語・ポルトガル語のミサにでているため会うことのない彼らとともに祈り、同じ共同体のメンバーであることを確認できました。

今回は聖書朗読、説教、聖歌が日本語、英語、ポルトガル語でなされました。西村師が英語で、柳本師が日本語で、ブルーノ師がポルトガル語でされた説教をすべて理解できた人はいないであろうと思われませんが、聖堂からあふれ出そうなるほど多くの人々が同じ福音を聞いたことで、一致への励ましとなりました。

ミサ後の交流会も、日本、フィリピン、ブラジルの食べ物並び、各国の歌が流れてたいへんにぎやかでした。

初めての国際ミサでしたので、いくつかの課題を残しましたが、それよりはるかに大きな希望を得ることができました。

## 社会と共に歩む教会の事例

### 世界平和を祈る市民の集い

#### 綾部教会

毎年八月六日の広島原爆記念日には、「世界平和を祈る綾部市民の集い」を行って十七年を迎えました。

教皇ヨハネ・パウロ二世が世界の宗教者とアシジで平和の祈りを捧げたのが一九八六年ですから、その翌年に綾部宗教者懇談会が教皇の主旨を基に結成されたことになりました。各宗教の教義を越えて人類の幸せと平和を一堂に会して祈ります。私たちカトリックは積極的にリーダーとしての責任を果たしてきました。過去三回綾部教会を会場に行われましたが、記念公演に筒井茅乃さん(永井隆博士の息女)を迎えたことは、特筆すべき一コマでした。

ミサの中で「神様、何かに役立たせて下さい」と祈っていますが、私たちは祈りと生活、祈りと行動を一つにしようと努めています。年令、性別、職業、民族、文化、趣味が違いますが、自分として何が出来ると、それぞれが地域や職場で工夫しながら、「沖へ漕ぎ

出しましょう」を合言葉に、信者として恥ずかしくないように頑張っています。

自分の趣味を生かしている人、ユニセフやチベット支援、ボランティアに参加したり、地域福祉に貢献している人、自治会、老人会、シルバーや民生児童委員として奉仕しています。月一回新興住宅団地へ「心のともしび」を配布いたします。教会で待っていても子どもは来ません。夏休み中子どもたちのラジオ体操に参加して交わりを深めた人もいます。

ロザリオの祈りの集いや役員会のとき、自分たちの活動の報告と聖霊の導きによる体験の分かち合いの中から共同体の一員としてのよるこびと共同宣教司牧の学習を深めています。(四方修吉)



世界平和を祈る綾部市民の集い

## 社会と共に歩む教会の事例

### 割り箸回収

#### 西陣教会

西陣教会が「割り箸回収」を始めたのは三年ほど前のことです。当時、京都南部北ブロック共同宣教司牧では、環境問題への取組みが一つのテーマとなっておりました。北ブロック協力司祭であったライムンド・チネカ神父様(フランススコ会)からNGOフランシスカンズインターナショナルの活動のお話などを聞くうち、西陣教会でも始めてみよう、という事になり、家庭や職場から出る割り箸を集め、或いは行きつけの飲食店から理解を得ていただいたりもしました。

集まった割り箸は教会で一時的保管し、十分に乾燥させた後ダンボール箱に詰め、ある程度貯まったら出荷しますので、出荷する量は、平均しますと二、三カ月に一度、その量は大きな目のダンボール箱四、五箱程になります。

送り先は、王子製紙米子工場です。ある信徒の婦人から、王子製紙が使用済み割り箸の回収をしている事を聞き、その中で一番近かつ

た米子工場を選びました。回収された割り箸は、製紙原料のチップに混ぜ再利用されます。割り箸三膳でA4用紙一枚が再生出来ます。昨年末に同工場環境管理室の向井哲郎氏からいただいたお礼状には「この回収運動の開始当初は〇・三〇〇月だった割り箸の量も、今では一・二〇〇月になった」また「西陣教会からの総量は三百二十二キログラムになった」との事が書かれていました。後に分かった事ですが、この向井氏こそ王子製紙の「割り箸回収運動」の提唱者で、ご自身が「手近で簡単に環境保護に役立つことをしたい」と社員食堂で集められたのが始まりとの事でした。

環境問題への取組みと言いますと、たいへん多くの分野があり、また精力的に活動されている方が数多くおられます。「割り箸回収運動」も今では全国規模になっているそうです。西陣教会で続けているこの運動は、数字的に見れば小さな活動ですが、環境問題に取組む意識を、常に他の活動をさしている多くの方々と同じ方向に向けて、「手近で簡単な」取組みとして今後も地道に続けていきたいと思えます。(柳本昇)

## イエスの奇跡

高山貞美神父 (聖心布教会)

聖書講座シリーズ「マルコ福音書を読む」9/17・18



マルコ福音

書では「天」

が三回開かれ

ます。一回目

はイエスの受

難(一章九

十一節)。二回目

はイエスの変容

(九章二

八節)、三回目

はイエス

の復活(十六章

一八節)の場面

です。これは神の

自己啓示によっ

て初めて人間の側

が「イエスとは

誰か」を理解でき

ることを示して

います。このよう

にマルコ福音書

はメシアとは何か

ということを少

しずつ論じ、明ら

かにするように

構成されています。

じていました。そのため悪魔祓い

などをしたのです。イエスの出現

により「悪の支配」から「神の支

配」へ百八十余の転換がなされま

す。それが奇跡です。このイエス

の奇跡により病人はいやされ、悪

魔は祓われます。「神の国」は、

神の側からやって来るもので、人

間の思いや作為によるものではあ

りません。イエスの言葉と行いに

より実現するものなのです。この

ことは、イエスが公生活で一貫し

てのべ伝えたメッセージ、「時は

満ち、神の国は近づいた。悔い改

めて福音を信じなさい」という言

葉に集約されると思います。です

から、イエスの告げる「神の国」

の到来は神の新しい行動として、

イエスの言葉と行いによりすでに

実現しているものと理解されます。

マルコ福音書における「奇跡物語」

の適切な理解は、病人の治癒や悪

魔祓いなどにみられるイエスの

「言葉・行い」を「神の国」の宣

が強調されるのです。

マルコ福音書は、このように奇

跡物語を通して私達一人一人を回

心に導き、「福音」を信じてイエ

スに従うように招いているのです。

そして深く味わうことにより私達

自身を回心の恵みに招く励まし

言葉なのです。

### 信仰のよき参考として

—親鸞の「聞思」について—

親鸞は法然上人の弟子で、その

名著「教行信証」は門徒にとって

バイブル的存在です。この総序で

「聞く」ことの重要性について訴

えています。念仏とは遠くインド

から中国、朝鮮半島を経て日本に

伝わってきた浄土仏教の「伝統」

で連綿と受け継がれ、証されてき

た永遠の真実の声です。キリスト

教もまた迫害の時代を経て、現在

に生きる私達にイエスの教えが届

いたものです。親鸞はこの伝統の

声を「会いがたくして、今、会う

ことを得たり」、「聞きがたくして、

すでに聞くことを得たり」と幸運

にも私達の手に、信仰の教えと

していただくことができた感謝

しています。しかも伝統の声とし

てとらえるだけでなく、思いめぐ

らすことによって、自分自身の深

い体験としてとらえ直す必要があ

るのですよ、と「聞思」の「思」

で教えています。

聖母マリアの信仰にも共通する

ものがあると思います。マリアは

まず神の声を聞いて、歴史を超え

てまず思いめぐらし、自分の肉と

し血としていきましました。

親鸞の「聞思」に倣って一人ひ

とりが年齢を重ねて、真実の声、

伝統の教え、カトリックの教えに

耳を傾けることの大切さを学びま

しょう。そして、それを我が身で

体験し、自分の言葉として証して

いく、これが福音宣教なのではな

いでしょうか。

私たち一人ひとりがイエスの奇

跡物語を学ぶことによって、そこ

イエスの奇跡は

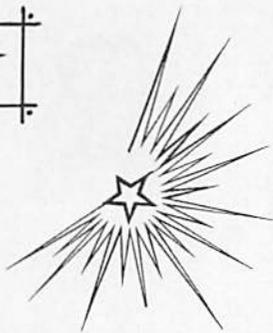
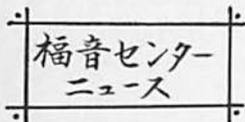
「神の国」の到来のしるし

当時のユダヤの人々は、病人や

悪霊にとりつかれた人々は悪の支

配にあり、これを取り除かなけれ

ば健康となることができないと信



## 感謝

今年も神の御独り子をお迎えする季節となりました。どんなにこの世界がすさんでいても必ず幼子を送ってくださる父、こんな世界だからこそ、神は独り子を生まれさせてくださる。子もまた父のこれ程までの世を愛する姿に共感して“生まれる”ことを受諾してくださる。しかし、幼子は果たして一人ひとりの心に産声を上げることが出来るのでしょうか……。その声は本当にかすかかかもしれません。

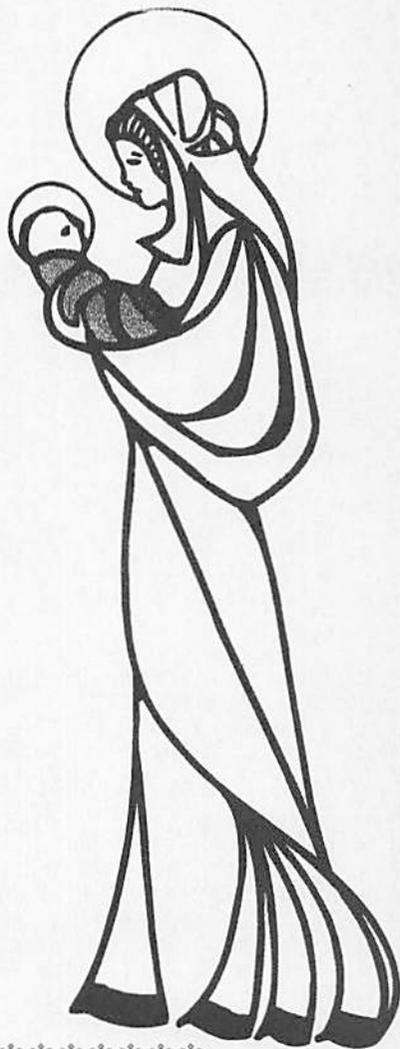
耳を澄ましましょう。イエスさまの産声が聴こえるように。静かに心を鎮めて、神にそして幼子に心を向けてじっと待ちましょう。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。  
この言は、初めに神と共にあった。…  
言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

(ヨハネ 1.1~4)

福音センターでは、この一年、人を照らす光のもとで生き、生かされている共同体づくりを目指してきました。

みなさまがセンターのコースや講座に関心を寄せ、ともに歩んでくださったことに感謝いたします。



## 2004年 結婚講座ご案内

第22回 日程 1月24日、31日、2月7日 (各土曜日) 10:30~15:00

第23回 日程 7月10日、17日、24日 (各土曜日) 10:30~15:00

会場 河原町カトリック会館 〒604-8006 京都市中京区河原町三条上る

問い合わせ 〒604-8855 京都市中京区壬生淵田町26 カトリック福音センター

Tel 075-822-7123

Fax 075-822-7020

E-mail [fukuin@kyoto.catholic.jp](mailto:fukuin@kyoto.catholic.jp)



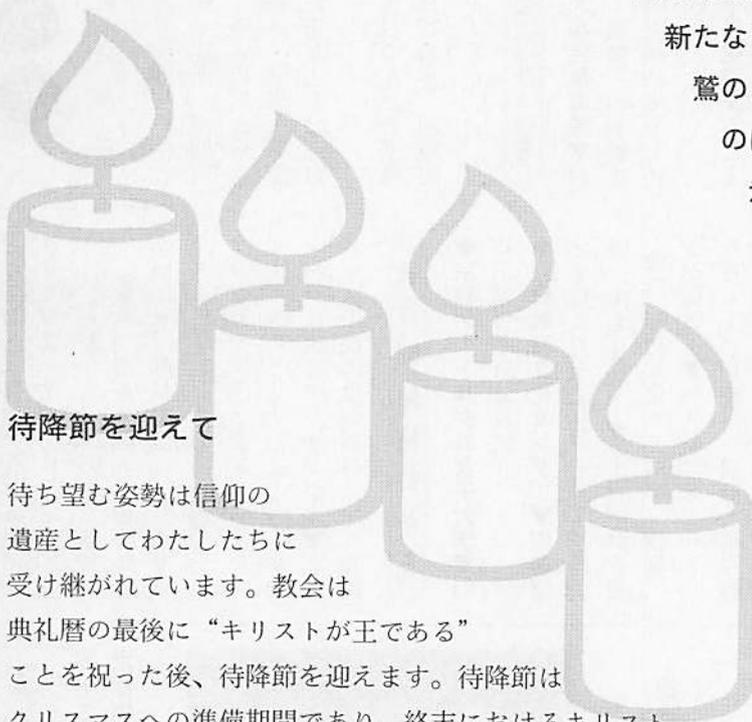
## 待ち望む

主を待ち望むものは  
新たなる力を得る。

鷲のように翼をはって  
のぼることができる。

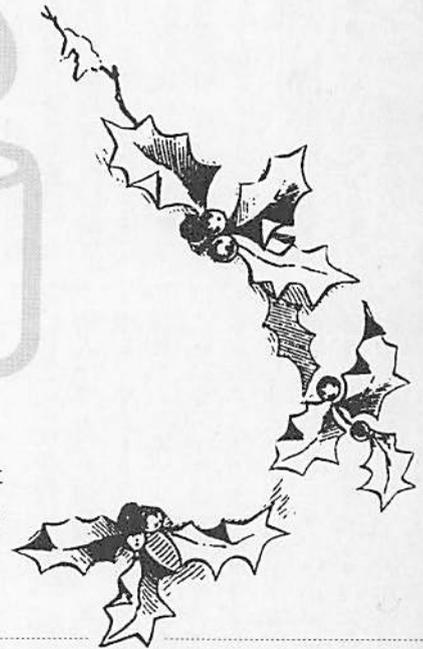
走っても弱ることなく  
歩いても疲れない。

(イザヤ 40:31)



### 待降節を迎えて

待ち望む姿勢は信仰の遺産としてわたしたちに受け継がれています。教会は典礼暦の最後に“キリストが王である”ことを祝った後、待降節を迎えます。待降節はクリスマスへの準備期間であり、終末におけるキリストの第二の到来（再臨）を待ち望み、心に向ける期間です。この時期は回心の期間というよりもむしろ、愛と喜びに満たされた待望の時です。そして何よりも神ご自身が一人ひとりの中で神のいのちが息吹くのを待っておられるのです。



二〇〇三年度 福音センターでは「つながっていますか キリストに」の言葉をもって信仰共同体への養成に取り組んできました。教会とは、私たち一人ひとりです。この一人ひとりがキリストに結ばれつながっています。このつながりは、パウロがいうようにどんな困難があっても、わたしたちをキリストの愛から引き離すことができない程のものであります。この愛を信じ、共に歩んでいくとき霊的な絆が深められていく共同体となるのではないのでしょうか。わたしたちは、信仰共同体として力強く歩むにあたって、神の約束に心を留め、一人ひとりの心のともしびを絶やさないように学び直す場を、来年もまた、提供していきたいと思えます。

## お知らせ

## 教区委員会から

◆聖書委員会▼聖書深読13日(土) 10時 新井延和師 場所 河原町 会館六階 費用二千五百円(昼食代を含む)、持参品 聖書・筆記用具・ノート(お申し込みは三日前までに)

◆典礼委員会▼主日のミサと聖体 賛美式第一日曜日17時半 河原町 教会

## 修道会から

◆京都女子カルメル会修道院▼14日(日) 13時半 講演「信じ愛すること―十字架の聖ヨハネ―」15時ミサ 北村善朗師

◆聖ドミニコ女子修道院▼みことばを聴こう「みことばと教父」1月17日(土) 14時 講師 大月栄子氏 対象 青年男女 会費三百円 申込み電話075(231)2017 Sr安達

## ブロック・小教区から

◆河原町教会▼クリスマス旬間行事 13日(土) 18時半 カトリック聖歌集による歌ミサ(聖堂)、18日(木) 19時 クリスマスのお話

とキャロル(聖堂)―ほんとうのクリスマスってなあに?―、20日(土) 18時半 クリスマス国際ミサ(聖堂) 滞日外国人との分かち合いミサ、22日(月) 19時 クリスマス 祈りと音楽の夕べ(聖堂)―エルサレムの子どもたちのために― オーボエ・フルート・チェロ・チェンバロによるアンサンブル▼クリスマス市民の集い24日(水) 19時

## 教育関係施設から

◆京都ノートルダム女子大学▼創立記念日8日(月)

◆聖母教育文化センター▼聖書講座1日(月)、15日(月) 19時 講師 Sr安藤敬子▼聖書講座5日(金)、12日(金) 9時半 講師 Sr安藤敬子▼「伏見学2003」6日(土) 13時半 講師 梅澤直樹氏(滋賀大学経済学部教授)この講座の場所 聖母女学院短期大学 テーマ「高度経済成長と伏見一町の求心力の観点から」▼以上いずれも受講料 無料 問合せ 075(643)2320

## 諸施設・諸活動から

◆JOC▼働いている青年の集い 京都働く人の家(九条教会前)、滋賀働く人の家(大津教会裏) 問

## こんにちはシスター

聖ドミニコ女子修道会  
京都修道院



写真右から  
Sr箭内  
Sr安達  
Sr鈴木  
Sr庄子  
Sr富岡  
Sr山田  
Sr中村

親想し親想したものを  
人々と分かち合う!!

「みことばを告げる人」、「対話の人」であった創立者ドミニコに倣い、私ども共同体の八名は派遣されている場で、各自の仕方で見ることが分かち合うよう努めているところです。Sr鈴木は今年九月金祝を迎えましたが宿泊来客者の迎え入れにいそしみ、Sr小池は書道を通して、修道院入り口にみことばを掲示したり、夜回りの会の方からのご依頼に応じて河原町教

会の地下で数人の方々と書を樂しむ一時も持っています。Sr山田は昨年十一月より病に倒れましたが今は病状も落ち着き穏やかに日々を捧げています。

Sr富岡は賛美の心で台所を引き受けて下さっています。Sr中村は滋賀地区湖東ブロックの共同宣教司牧の協力者として週三日彦根、長浜教会の方で過ごしております。Sr箭内は聖ドミニコ学院京都幼稚園の園長として幼児教育とその母親達の子育て支援に力を注いでいます。

Sr庄子は四月から週に三日、福音センターで働いています。Sr安達は修道院の責任者ですが今年度から幼稚園にも携わっています。

各自、それぞれの使徒職にいそしみながら共同体全員で「みことばを聴こう!!」という青年たちの集いや聖書夜話、また念禱グループの方々と共に祈りを深めるための一時も持っています。静けさと、又お庭の空間があるため数日の黙想の依頼等もあり、本会の本来のミッションが確実に果されつつある事を神様に感謝しながら更に教区の皆様とご一緒に歩みつついたいと願っております。

- 合せ090(8207) 1831  
 ◆おてんとさんの会▼19日(金) 13時 西院教会  
 ◆京都カナの会▼結婚相談室・例会7日(日) 13時半 河原町会館六階ホール  
 ◆京都カトリック混声合唱団▼練習日第2日曜14時、第4土曜19時 河原町会館六階ホール  
 ◆京都キリシタン研究会▼懇親会7日(日)  
 ◆コロチエレステ▼練習 第2木曜日10時 河原町会館六階ホール  
 ◆在世フランススコ会▼京都兄弟会20日(土) 13時半 フランススコの家  
 ◆聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会▼河原町協議会14日(日) 13時半▼京都中央理事會21日(日) 13時半 河原町教会  
 ◆二金会▼第二金曜日10時15分 場所 西陣教会  
 ◆糖みその会▼例会11日(木) 19時45分 九条教会ホール  
 ◆レジオ・マリエ▼コミチウム7(日) 河原町会館六階  
 ◆心のともしび▼12月番組案内▼テレビ・主な放送内容『曾野綾子のアフリカ報告』他▼ラジオ・テーマ『神の子の誕生』問合せ075

(211) 9341

◆「二万匹の蝶運動」基金報告  
 累計三九、〇九九、〇二八円  
 (十月十四日現在)

## 山科教会献堂五十周年

## 感謝ミサと謝恩祝賀会

山科教会では四年前から、アンケートを実施するなどして全員の意見を集約し、結論として一時的なお祭り騒ぎや余計な費用支出を抑え五十年前の初心に返りお互いの信仰を深めるよい機会にしようとして取り組んできた。—中略—

十月十二日、会場となった幼稚園ホールの舞台には「ひとつになろう」を象徴する全員参加の4×3メートルのタペストリーが掲げられ、琴・尺八演奏とマリアクラブ有志らによるお茶席が設けられ、和の世界が演出されて、終始なごやかに催された。

(岡本美則)

## 良書紹介

『ほしがりのやのサンタさん』  
 『サンタさんのふしぎなふくら』

福永 礼三・文  
 松井しのぶ・絵

(サンリオ)

これはサンタのクリスマス・プレゼントに関するちょっと変わった二つのお話

一つは、プレゼントをほしがる、サンタさんの話

バスの運転手の太田さんは、吹雪に閉じこめられます。今日はクリスマス。二人の子どもたちへのプレゼントとケーキを用意しています。そこへ、疲れたサンタがやって来ます。サンタはあげるばかりで、プレゼントをもらったことがありません。

「品物を与えるのは、普通のサンタ、本物は愛をプレゼントする」とか何とかが言って、お腹がすいていたのでケーキを、二頭のトナカイのために子どもたちへのプレゼントを、所望します。その言い方が愉快なのです。ともかく、あげてしまったので、子どもたちへの贈り物はなくなりましたが、太田さんは、子どもたちから、本当のプレゼントをもらったのでした。

もう一冊。

あげるばかりは、つまらない、何かもらいに歩こうと考えたサ

ンタは、トナカイの助言を受けて、子どもたちの悲しい気持ちや、痛い気持ち、こわい気持ちなどをもらって袋に一杯つめて帰って行こうとします。その袋がほしいと考えた、どろぼうが、サンタをうまくだまして、まんまと袋を持って空へ逃げて行きます。あんまりつよく抱きしめたものですから、中にいたおぼけたちが、苦しがつて顔を出し、どろぼうをなめはじめます。さあたまったものではありません。「ひえっ、助けて、お母さん」と叫びながら、真つ逆様に落ちていく、袋のひもがとけて、中から熱や痛みが飛び出し、どろぼうは「うーん」とうめいたきり気を失ってしまいました。

高い熱にうなされながら、お母さんにあいたいと思っていたどろぼうの願いを、「あいたい袋」がかなえてあげたのでした。やさしいお母さんのおもかけは、どろぼうをすだいに清めていきました。

袋を元通りにすると、サンタはメリークリスマスと言って、別れて行きました。その声はお母さんの声のよう。どろぼうもメリークリスマスとささやきまじった。声は小さかったけれど、きつと神様にといたことでした。

# 「大塚司教」の

## 12月のスケジュール

- 1日(月)～2日(火) 青少年委員  
員会研修会
- 3日(水) 中央協機構改革委員会  
15時
- 4日(木) 中央協常任司教委員会  
10時  
中央協新聞部移行チ  
ム16時
- 4日(木)～5日(金) 中央協社  
会問題勉強会16時
- 6日(土) 宮津ブロック黙想会
- 7日(日) 宮津ブロック 司教訪  
問(宮津教会)
- 9日(火) 中央協諸宗教委員会15  
時
- 10日(水) 信仰教育委員会15時
- 11日(木)～12日(金) 大阪管区  
司教会議
- 14日(日) 高見司教着座式15時  
(長崎)
- 16日(火) 聖母学院職員研修会16  
時
- 18日(木) 司教顧問会・責任役員  
会9時半  
濱尾枢機卿就任お祝い  
ミサ17時(東京カテド  
ラル)

24日(水) 河原町市民クリスマス  
19時半(河原町)

主の降誕深夜ミサ23時  
半(河原町)

25日(木) 主の降誕ミサ(河原町)  
10時半

28日(日)～29日(月) 教区高校  
生会冬合宿

### ◆帰天

▼シスター竹田マリ子(聖母カテ  
キスタ会)が十月六日帰天されま  
した。九十一歳でした。永遠の安  
息のためにお祈りください。



◎先日、北国の観想修道会でも本  
誌が愛読されていることを知り、  
さらに良い誌面づくりのために祈  
りました。(YT)

### ◆編集部から

お知らせに載せたい情報は、2  
月号でしたら12月15日までに、3  
月号でしたら1月19日までに、京  
都司教区本部事務局内「京都教区  
時報」宛にFAXか、またはEメー  
ル [henshu@kyoto.catholic.jp](mailto:henshu@kyoto.catholic.jp) にお  
願いします。

## 青年センターは十五歳になります 中井 陽

来年の一月十五日、青年セン  
ターは十五周年を迎えます。青  
年活動を支援するための場とし  
てこのような機関が設けられて  
いる教区は、日本では京都のほ  
かには殆どありません。それが  
こうして十五年という大きな節  
目を迎えられるのも、ひとえに  
常日頃からご支援頂いている皆  
様のおかげと心より感謝いたし  
ます。そして、私自身もその間  
に青年センターを通して、教区  
内外さらに海外まで、多くの人  
たちと出会い、貴重な体験を得  
て成長してこられたと思います。  
多くの方々の支えに感謝すると  
ともに、この喜びをさらに多く  
の人と分かち合いたいと思っ  
ています。

さて、先日の運営委員会で、  
私たちはこの大きな節目をどの  
ように迎えるか話し合いました。  
今のところ特別な集いは企画し  
ていません。その代わりに私た  
ちは、この十五年間の歴史を振  
り返ることを決めました。

いま青年センターに関わる青  
年で、設立当初のことをよく知

るものももう誰もいません。教  
会や社会の状況も十五年間で大  
きく変わったと思います。青年  
たちのニーズもしかりです。い  
ま関わる私たちも、じきに次の  
世代にバトンタッチすることに  
なります。現在を見つめ、将来  
を見据えるために、改めて過去  
を振り返ることにしたのです。  
そこで皆様、特にかつて青年  
センターに関わっておられた皆  
様にお問い合わせがあります。どのよ  
うにまとめるか、またどのよう  
な形で公開するか、この原稿を  
書いている段階ではまだ具体的  
に決まっていませんが、昔の様  
子がわかるものを青年センター  
にお寄せいただきたいのです。  
いま振り返って思うこと、ちょっ  
としたエピソードや写真などな  
ど、皆様からの貴重な声をお待  
ちしています。

そして今後とも青年センター  
に暖かいご支援を賜るようよろ  
しくお願いいたします。

ホームページ  
(<http://www.kyoto.catholic.jp/sai>  
nen/) も是非ご覧ください。